

18世紀フランスの最も猥褻なリベルタン小説： 『カルトゥジオ会修道院の門番であるドン・B***の物語』

関 谷 一 彦

I. はじめに

18世紀フランスのリベルタン小説のなかで、最も猥褻な作品は何であろうか？ プレイヤッド版の『カルトゥジオ会修道院の門番であるドン・B***の物語』¹⁾を校訂したアラン・クレルヴァルは、その「解題」で次のように述べている。

『ドン・B***の物語』の最初の三つの版（1741年1月版、その版が見つからない1741年6月版および1748年版）の歴史に限ってみても、警察の捜査を通してわかるのは、この小説が猥褻な小説のなかで最も「地獄行きのもの」として、18世紀末まで直接的な影響を及ぼしたテキストであるということだ²⁾。

- 1) 原題は、*Histoire de dom B***, portier des Chartreux, écrite par lui-même*。以下、邦題は『ドン・B***の物語』と略す。「ドン・B***」の「ドン (Dom)」は修道者の称号であり、「B***」は「ブグル (Bougre)」を表し、「男色家」を意味する。省略記号が用いられているが、おそらく当時の読者には自明であっただろう。サドは、『閨房哲学』のなかで、ドルマンセに次のように語らせて、「ブグル (Bougre)」を定義している。「僕 [ドルマンセ] は男のお尻も、女のお尻もともに好きだが、はっきり言ってしまうと、少年のお尻の方が、少女のお尻よりもっと快感が得られる。世間では、こうした道楽に耽る人々を、男色家 (Bougre) と呼んでいる。」(Sade, *Œuvres*, Bibliothèque de la Pléiade, t. III, 1998, p. 47. 強調はサド。)
- 2) Alain Clerval, *Notice in Romanciers libertins du XVIII^e siècle*, Bibliothèque de la Pléiade, t. I, 2000, p. 1112.

「地獄行きの (infernal)」という形容詞は意味深長だ。というのも、フランスでは「公序良俗に反する」図書は、「地獄 (Enfer)」というレッテルを貼られ、国立図書館の「地獄部屋」に隔離されて所蔵されてきたからだ。「猥褻か否か」、「羞恥心を傷つけるか否か」は、個人の問題でもあり、客観的な判断を下すことに向かない問題である。しかし、クレルヴァルが問題にしているように、「警察の捜査を通して」当時の権力がどれほどこの作品を注視し、危険視していたかを浮かび上がらせることはできる。それが、『ドン・B*** の物語』であるとするなら、なぜ権力はこの作品を許すことができなかったのだろうか？ 「公序良俗に反する」とはいえ、このテキストのどのような部分が権力をいらだたせたのだろうか？ 他方、出版する側に立てば、危険を顧みず18世紀を通して繰り返し再版したのはなぜなのだろうか？ そこには読者の存在が不可欠だが、読者はこのテキストをどのように受け入れたのだろうか？ テキストの何が読者の関心を惹き付けたのだろうか？ 本論ではこうした疑問について考えてみたい。まずは『ドン・B*** の物語』がいつ出版され、その後警察がこの作品について行った捜査を見てみることにしよう。『ドン・B*** の物語』は日本語訳もなく、その解説もわが国ではほとんどないことから、まずはこうした周辺部を明らかにしておくことは重要であるだろう。

Ⅱ. 出版と警察の捜査

フランス国立図書館に現存する『ドン・B*** の物語』の初版本 (Enfer 326) は、1741年1月に出版されたと言われている。しかし、警察調査によると、1740年12月17日に行商人オシュロ (Auchereau) が、「猥褻本、とりわけ『ドン・B*** の物語』を小売りした」として逮捕されている。このことは、1741年版の前にすでに印刷されていた版があったことを示している³⁾。とは言っても、

3) 「出版と警察の捜査」に関するこれらの情報は、ユベール・ジュアンの『国立図書館の発禁本』の「まえがき」およびブレイヤッド版『18世紀のリベルタン小説家たち』所収のアラン・クレルヴァルの「解題」に基づいている。Hubert Juin,

両者には数週間の時間差しかないことから、同じものと考えてのが妥当ではないか。クレルヴァルも、オシュロが1月の版より前の版を売っていた証拠がないので、1741年1月の版を初版本と見做そうと言っている⁴⁾。

当時、書籍の印刷、普及を妨げる責任を担っていた警部のデュビュ (Dubut) は、ル・カミュ侯爵 (marquis Le Camus) とその愛人である喜劇役者のオリエ (Ollier) を『ドン・B*** の物語』の発行人として目をつける⁵⁾。デュビュによると、二人は発禁本の小売商をしていた。ル・カミュ侯爵は、モラン (Morand) という名の公証人が出資した5000リーヴルの資金で、プロワ近くでテキストを印刷させる。オリエ嬢は、3月8日にバステューユに送られた。彼女はダランヴィル夫人 (Mme d'Alainville) から仕事部屋を借りていた。後ほど登場するヌリ神父 (L'abbé Nourry) は、このダランヴィル夫人の兄弟である。オリエ嬢の部屋に警察が踏み込み、綴じられていない原稿を押収した。おそらくそれが28葉の挿絵版画ではないかとクレルヴァルはみている。

3月21日付のデュビュの報告によると、カミュ侯爵とヌリ神父はオリエ嬢の釈放のために奔走し、彼女は6月22日に釈放されるが、トゥルーズに追放されてしまう。ダランヴィル夫人の兄弟のヌリ神父は、夫人の求めに応じて、カミュ侯爵のために『ドン・B*** の物語』を行商人たちに1ルイで販売した廉で、4月14日にバステューユに送られる。その後彼は、ドーヴェルニュ枢機卿 (cardinal d'Auvergne) の要求によって、7月5日にバステューユから釈放され、リヨン司教区のサン＝ランベール修道院に追放された。

また、パリ警視総監秘書のデュヴァル (Duval) の報告書によると、ステラ

Préface in *Œuvres anonymes du XVIII^e siècle I, L'Enfer de la Bibliothèque Nationale 3*, Fayard, 1985, pp. 19–28 ; Alain Clerval, Notice in *Romanciers libertins du XVIII^e siècle*, Bibliothèque de la Pléiade, t. I, 2000, pp. 1104–1110. クレルヴァルによると、警察資料の引用は、以下による。Bibliothèque de l'Arsenal, ms. 11505 et 11694.

4) Alain Clerval, *ibid.*, p. 1105.

5) オリエ嬢については、ジュアンは二人のオリエ嬢がいると指摘している。彼女たちはリヨンの本屋の娘で、その後女優になり、最後には発禁本の商売に手を染めるようになった。詳細は以下を参照のこと (cf., Hubert Juin, *op. cit.*, p. 25)。

(Stella) という人物が、ルーアンの印刷業者であるジャン=バティスト・マシュエル (Jean-Baptiste Machuel) を介して、1741年1月の版である1400~1500部のうち700部をオランダに送る。行き先はハーグの本屋ポーピー (Paupie) であった。デュヴァルは彼の同僚であるポトカレ (Potcarré) に『ドン・B*** の物語』を含む大包みを差し押さえるように依頼するが、うまくいかなかった。ユベール・ジュアンによると、印刷物が積み込まれたのは2月19日または21日であり、パリ警視総監マルヴィル (Feydeau de Marville) の命令がポトカレに届いたのは24日であったため、手遅れだった。ジュアンは『ドン・B*** の物語』の輸送に関して面白い指摘をしている。それは、フランスからオランダへの移送は綴じられていない紙のままで行われ、タイトル表示もなく、オランダの本屋がそれを組み、綴じていたという点だ。したがって、パスカル・ピア (Pascal Pia) も述べているように、18世紀では同じ作品に二つの版がしばしば見られるというわけだ。

『ドン・B*** の物語』初版の別の一部は、ヴェルサイユのタラル公爵 (duc de Tallard) の下男であるマイヤール (Maillard) のもとに保管される。マイヤールはまず市役所に留置され、その後4月10日にピセートルに移されたことまではわかっている。おそらく彼の部屋から『ドン・B*** の物語』が何冊か見つかったものと思われるが、詳細についての資料はない。

さらに二人の共犯者がいる。織師のブランジ (Blangy) と画家でビュラン彫りの版画家のフィリップ・ルフェーヴル (Philippe Lefèvre) である。ブランジは1738年からカミュ侯爵に『ドン・B*** の物語』の挿絵版画を依頼されていたが、彼はその仕事をルフェーヴルに依頼する。28枚の版画のうち、ルフェーヴルが18枚、残りの10枚は誰が彫ったかわからない。

デュビュの報告によると、ステラがカイリユス伯爵 (comte de Caylus) のもとに行くようにルフェーヴルに勧める。デュビュは3月21日付の手紙で、カイリユス伯爵に触れているので、多くの書誌学者は、カイリユス伯爵に挿絵版画を帰している。クレルヴァルは、ステラの求めに応じて、残りの10枚の版画を彫らせたのはカイリユス伯爵である可能性が高いと考えている。というの

も、伯爵は芸術家たちの保護者であり、また彼自身も画家、版画家で、リベルタン物語の作者であったからである。ルフェーヴルは2月28日にバステューユに投獄され、7月6日に釈放。ブランジとその妻は2月28日に逮捕され、妻は4月15日、ブランジは5月13日に釈放されている。

1741年6月以降、『ドン・B*** の物語』の第二版の噂が広まるが、それは現在まで見つかっていない。デュビュは6月10日、ドムレ (Domeret)、ギユウ (Guillou le jeune)、ミシェル・ヌヴ (Michelle Neuveu) を『ドン・B*** の物語』の販売および第二版にかかわった廉で逮捕して、バステューユに送っている。また、日付のない彼の別の報告書には、トミネ (Thominet) を含む6名を『ドン・B*** の物語』の再版の廉で告発している。ドムレに売ったのはトミネである。ラ・リュゼルヌ侯爵 (marquis La Luzerne) およびその妻の仲介によって、ドムレは8月11日に他の二人とともに釈放された。第二版では、「もっとも剥き出しの挿絵」が、ばらばらに売られていた。バステューユに投獄されていた人物のリストはその後にもさらに続くことになる。

1748年にはさらに新しい版が出る。この版について、1749年2月2日、モンティニイ (Montigny) を尋問する。彼はブザンソン生まれの当時47歳の平貴族であった。リエージュでスパイとして働く傍ら、リエージュ滞在を利用して猥褻本を印刷して、オーストリアとの王位継承戦争でリエージュにいたフランス軍の兵士たちに猥褻本を売ることを計画し、『女哲学者テレーズ』の初版本および1748年版の『ドン・B*** の物語』の印刷費用を出資した⁶⁾。取り調べによると、リエージュの印刷屋ドウロルム・ラトゥール (Delorme Latour)⁷⁾ とパリの製本屋ミシェル・ガナシュ (Michel Ganache) が共犯者であった。ルヴェ (Louvét) と呼ばれる男が、ガナシュに1200部の『ドン・B*** の物語』を12個の包みでパリに運び入れることを提案した。ガナシュはヴェルサイユに

6) このあたりの経緯については、拙訳『女哲学者テレーズ』人文書院、2010の「訳者解説」pp. 179-180を参照のこと。

7) ムローの解説では、Jacques de Lorme de la Tour という名前になっている (cf., *Thérèse philosophe*, par François Moureau, Publications de l'Université de Saint-Etienne, 2000, p. 11)。

いる荷車引きのラルンド (Lalonde) のもとを訪れ、12個の包みを受け取る。ガナシユはその包みをヴェルサイユ宮殿の教会近くの3階にある部屋に預けた。1749年7月26日のダルジャンソン (d'Argenson) 宛の文書によると、警察は王の説教師の寝室で『ドン・B*** の物語』を発見する。ガナシユは1750年5月17日に逮捕され、7月9日に釈放。モンティニイは8月16日になるまで釈放されなかった。

以上が、『ドン・B*** の物語』の出版と初版出版直後の警察の捜査の概要である。この後1770年代と1780年代に出版が繰り返されるが、それは儲かる作品であったからだろう。その背景には、読者が読みたいと思う魅力が『ドン・B*** の物語』にあるということだ。その魅力を考える前に、まずは作者が誰であるのかを見ておくことにしよう。

Ⅲ. 『ドン・B*** の物語』を書いたのは誰なのか？

警察の初動捜査は早かった。先に述べたように、初版本が出る以前、つまり1740年の終わりに、すでに行商人のオシュロが逮捕されていることから、警察は『ドン・B*** の物語』の情報を迅速に入手し、本書を危険視し、その作者を見つけ出そうと躍起になっている。最終的に警察が絞り込んだ作者は、ビラルル (Billard) とラトゥシユ (Latouche) であった。ヌリ神父の尋問調書の要約の裏面に残されていた文書には、検察官のランボット (Lambotte) のもとで書生であったジェルヴェーズ (Gervaise) という名の男 (ラトゥシユのこと) が、手書き原稿を400~500リーヴルで売り、そのことを後悔しているという記述がある。4月初め以降、警察はジェルヴェーズが手書き原稿の販売にかかわった仲介者であるだけでなく、作者ではないかと疑い始める。ヌリ神父の供述通り、彼はランボットの家に住んでいるが、ビラルルも同様に書生としてランボットの家に住んでおり、警察はどちらが作者なのか迷うことになる。

4月14日、パリ警視総監マルヴィルは家宅搜索の文書に署名する。その理由

は、「反宗教と反国家および良き道徳に対する違反」であった。しかしながら、証拠となるものは何も発見できなかった。そこで、4月15日、二人を逮捕するための王命をとることをマルヴィルは決断する。その容疑は、『『ドン・B***の物語』という猥褻本を作ったからである』とデュビュは書き残している。

宰相であったフルーリ枢機卿 (cardinal de Fleury) はビラルール逮捕の報告を受ける。4月19日、ビラルールはバスティーユに送られる。4月24日に、作者について尋問を受けたヌリ神父は「二人を知らない」と答えている。ビラルールはバスティーユで20日間を過ごした後、釈放のための文書に枢機卿が署名する。「この作品にいかなる関与もしていないと思われるので、5月9日ビラルールを釈放する命令に署名した」と枢機卿は言っている。

不思議なことに、ビラルールは拘束されたが、ラトゥシュは逮捕されなかった。彼には強力な保護者であるモルパ (Maurepas)⁸⁾がいたからかもしれない。ラトゥシュの友人であるビラルールがバスティーユからすぐに釈放されたのもこの保護者のおかげかもしれない。

しかし、クレルヴァルは作者をラトゥシュ一人に帰すことに疑問が残ると言っている。それは、二人の書生が協力して作品を作ったかもしれないからだ。今になってみれば、正確なことはわからない。こうした曖昧さを残しながらも、現在では『ドン・B***の物語』の作者は、ジェルヴェーズ・ドゥ・ラトゥシュ (Gervaise de Latouche) と見做され、プレイヤッド版の「解題」を書いたクレルヴァルにしろ、『国立図書館の発禁本』の「まえがき」を書いたジュアンにしろ、最終的に作者をラトゥシュに帰している。おそらくラトゥシュを作者とする根拠として、バショモン (Bachaumont) が『秘密の回想録』で、ラトゥシュの死後二日後に、彼について次のように書いていることが根拠になっていると思われる。

8) Jean-Frédéric Phélypeaux, comte de Maurepas (1701-1781) のこと。モルパ伯爵は当時海軍大臣であった。ルイ16世の下では、國務大臣になった。

1782年11月30日

ジェルヴェーズ氏が亡くなった。彼は、あの有名で彼に多大な苦痛を与えた『ドン・B*** の物語』の作者である。彼はそれ以後弁護士業に自分のすべてを奉げ、そこではこの作品の作者であることに反対して、重大で、学術的な報告書を作成した。彼は冷ややかな外見をしていたが、それは『ドン・B*** の物語』の驚異的な熱意と好対照をなしていた。この作品はその種のなかでも独創的な傑作であり、もっとも淫らで猥褻な絵画の隣に、もっとも卓越した道徳が時おり見出される。

ジェルヴェーズ氏は年を取ると、自分の全財産をゲメネ王子 (le prince de Guéméné) に預けていたが、王子の破産の知らせが彼に突然の死をもたらしたと言われている⁹⁾。

ではジェルヴェーズ・ドゥ・ラトゥシュとはどのような人物なのだろうか？ ラトゥシュは1715年アミアン生まれで¹⁰⁾、1738年に『ボヌヴァル嬢の回想録』(*Mémoires de Mademoiselle de Bonneval*) という作品を、『ドン・B*** の物語』の前に書いていたことが知られている。『ドン・B*** の物語』の出版時には、検察官のランボットのもとで書生であったことはすでに触れたが、その後高等法院の弁護士になる。どのような活動をしていたのかは不明だが、『ドン・B*** の物語』の作者と見做されて、それと闘っていたのではないかとバショームの記述からはうかがえる。また、後ほど触れるサドの記述では、「臨終の床で作者であることを悔悛したそうだ」と書かれている。1782年11月28日に没する。以上が『ドン・B*** の物語』の作者と考えられるラトゥシュについてのわれわれが知りうる情報である。では、『ドン・B*** の物語』はなぜよく読まれたのか？ その魅力について考えてみよう。

9) Bachaumont, *Mémoires secrets pour servir à l'histoire de la république des lettres en France, depuis 1762, jusqu'à nos jours*, Londres, 1783, t. XXI, p.210.

10) ラトゥシュの生年については、1715年が定説である。クレルヴァルは1716年としているが、その根拠は示されていない (cf., Alain Clerval, *op. cit.*, p. 1105)。

IV. 『ドン・B*** の物語』の魅力

ジュアンは『ドン・B*** の物語』がもつ三つの関心を読み取っている。その三つとは、1) 肉体の発見であるエロティシズム、2) 世界に投げかけられた眼差しである哲学、3) 社会的慣習についての判断である批判、である¹¹⁾。これらは、言い換えると、1) 性への関心、2) 哲学的関心、3) 社会的慣習についての関心と読み替えることができるだろう。すでに拙著『リベルタン文学とフランス革命』で指摘したように、18世紀フランスの「仮想の読者」の関心は、「道徳、宗教、哲学」に向いている¹²⁾。「道徳、宗教、哲学」は三つの領域として表示されているが、これらは底辺でそれぞれが緊密に結びついている。道徳はキリスト教と密接に結びついているし、キリスト教はスコラ哲学に支えられている。18世紀だけで10版近くが印刷された『ドン・B*** の物語』は、ロバート・ダーントンが指摘するように、18世紀文学のベストセラーのひとつであった¹³⁾。何が読者を惹き付けたのだろうか？ 当時の読者は、リベルタン文学の中心に位置するこの作品から、いったい何を読み取ったのだろうか？ こうした疑問について考えてみたい。

1. 性への関心

おそらく18世紀の読者は『ドン・B*** の物語』を読みながら、これまで読んだこともない露骨で、猥褻で、あけすけな性描写に心を惹き付けられたのではないかと考えられる。それは、同じ時期に刊行されたクレヴィヨン・フィスの『ソファ』と比較してみれば一目瞭然である。どちらも「性」をテーマにした作品であるが、『ソファ』における性描写は、優雅、繊細、暗示的、間接的

11) Hubert Juin, *op. cit.*, p. 19.

12) 拙著『リベルタン文学とフランス革命』関西学院大学出版会、2019の「第5章 『女哲学者テレーズ』」を参照のこと。

13) Robert Darnton, *The Forbidden Best-Sellers of Pre-Revolutionary France*, Fontana Press, 1997, p. 87.

あるのに対して、『ドン・B*** の物語』は露骨、刺激的、明示的、直截的で読者の肉体に直接作用するようなエクリチュールである。ルソーが「片手で読む本」と言ったような、性的刺激を生み出す力が『ドン・B*** の物語』にはある。この「性的刺激を生み出す力」こそ、現在のポルノ本の要素である¹⁴⁾。では、こうしたポルノ本の要素はどのような箇所に見られるのだろうか？ そのうちのいくつかを見てみよう。ある日偶然に、母トワネットとポリカルブ神父が隣の部屋で性行為にふけるのを、主人公のサテュルナンが間仕切りを通して覗き見る場面である。『ドン・B*** の物語』で、最初に性的場面が語られ、サテュルナンが性に目覚める箇所である。

これまで味わったことのない炎が自分の血管に入り込み、顔は炎のように燃え、心臓はドキドキし、息を殺していました。手にもったヴィーナスの槍は、もし僕がもう少し強く間仕切りを押していたなら、壊してしまうほど強く、硬くなっていました。神父は自分の仕事を成し遂げると、トワネットの体から降り、僕は彼女の体の一部始終を目にすることができました。彼女は死んだような目をして、その顔は真っ赤でした。息も絶え絶えになり、両腕をだらりと垂れ、喉は驚くほどの速さで上下運動をしていました。ときどき尻をぎゅっと締め、体をこわばらせ、大きなため息をつきました。僕の目は信じ難い速さで彼女の肉体のあらゆる部分を駆け巡り、僕の想像力が火のようなキスにならない箇所はなく、彼女の乳房や腹を舐めていました。しかし、もっとも魅力的な箇所、ひとたび僕がそこに目をやると、もはやそこから離れない箇所、それは……でした。それがどこかはもうおわかりでしょう！ この貝殻は僕にとってなんと魅力的だったでしょう。ああ、なんと素晴らしい色をしていたことでしょう！ 小さな白い泡で覆われているけれども、僕には鮮やかな色そのものであるように思えました。僕が感じた快樂から、そこは快樂の中心であることがわかりました。濃い、黒い、縮れた毛で覆われていました。トワ

14) 『ブリタニカ国際大百科事典』では、「ポルノグラフィー」を「性的興奮をもたらす目的でエロティックな行為を書物、絵画、彫刻、写真、映画などの形で表現したもの」と定義している。

ネットは脚を広げていました。その淫らさといったら、これ以上欲望を掻き立てるものがないというほど、僕の好奇心を満たしているように思われました¹⁵⁾。

ここでは「性」が視覚を通して語られている。視覚は、感覚器官のなかでも、性的快楽にとってもっとも重要な器官であり、テキストを読みながら読者はサテュルナンの視線を追うことになる。フランス語の直説法半過去形で描かれたサテュル



Enfer 326

©BnF

ナンの眼差しは、映画カメラのようにゆっくりと部分を映し出し、場面を映像化している。テキストのなかでは、サテュルナンが覗き見る者であるが、読者もまた彼とともに覗き見る。サテュルナンの興奮は読者の興奮を掻き立て、読者はサテュルナンと一体化する。もちろん読みは多様だが、ここにはポルノの要素としてのリアリズムがあることは疑いえないだろう。こうした箇所は『ド

15) Gervaise de Latouche, *Romanciers libertins du XVIII^e siècle*, Bibliothèque de la Pléiade, t. I, 2000, pp. 337-338. 以下、『ドン・B***の物語』のテキストはすべてプレイヤッド版を用いる。

ン・B***の物語』のなかには溢れている。いやむしろ、性的場面の連続によって物語は構成されている。

別の場面をもう一つ見てみよう。サテルナンが、姉のスズンを彼の部屋に誘い、先ほどと同様に神父とトワネットの性行為を彼女に間仕切りから覗かせながら、姉に悪戯を働く場面である。とりわけここでは視覚だけではなく、触覚による性的刺激が描かれている。

そのとき僕は隣の手本がどこまで効果があるのか知りたくて、最初にスカートの下に手を入れてみました。彼女はあまり抵抗をする様子もなく、その手をゆっくりと押し返すだけで、太腿まで伸ばしても嫌がる気配はありませんでした。彼女は太腿を強く締め付けていましたが、隣の部屋のおかげで、その太腿がゆっくりと開くのがわかりました。神父とトワネットが与えたり、受け取ったりしたときのリズムに合わせながら、挟まれた僕の手は彼女の魅力的な太腿を登っていきました。ついに、僕は目的に達しました。そのときスズンは抵抗することもなく、僕の好きなようにさせてくれ、自ら脚を広げて、僕の手が自由に動けるようにしてくれました。僕はこの機会を利用して、敏感な部分に指をあて、その指をわずかに挿し込みました。彼女は敵がその場を奪ったと感じるや否や、震えました。その震えは、僕の指のほんのわずかな動きでも繰り返されました。「君は僕のものだ、スズン、掴まえたよ」と僕は言いました。僕はすぐに彼女のペチコートを後ろから捲りました。そして僕は見たのです。ああ！ 想像できるなかでもっとも美しく、もっとも白く、もっとも形が良く、もっとも引き締まった魅力的なかわいいお尻を見たのです。ありえない、僕がこれまで生きてきたなかで見たことがないお尻、僕が楽しんだどのお尻よりも見事なお尻、僕の大切なスズンのお尻に匹敵するものはどれ一つとしてありません！ 顔色に勝る素晴らしい色をした神聖なお尻！ その素晴らしいお尻に僕は何度もキスをしました。僕があなたに払わなければならなかった敬意をそのときに払わなかったとしたらお許してください！ そうなのです、あなたは称賛に値するし、もっとも純粋な香に値します。しかし、あなたはあまりにも魅力的な隣人をもっていました。僕の趣味はまだ十分に洗練されておらず、あなたの本当の

価値を知りませんでした¹⁶⁾。

18世紀の読者はこのような「性の記述」をどのように読んだのだろうか？ 罪の意識はあったのだろうか？ 当時の読者の内面を明らかにすることは難しいが、禁欲を求めるキリスト教世界にあって、こうした記述が読者に衝撃を与えたことは容易に想像できる。

リベルタン文学は「性を内包した、反逆的な文学」であるが¹⁷⁾、『ドン・B***の物語』が描き出す登場人物は、サテュルナンのみならず、姉のスュゾンにしろ、その友人のモニックにしろ、欲望に支配される人間である。こうした理性を逸脱した登場人物を前にして、読者は自分の欲望について考えざるをえないのではないか。キリスト教が説くモラルとは相容れない世界に足を踏み入れて、真実とは何なのかという疑問にも導かれたのではないか。覗き見るサテュルナンは、自分の肉体が欲望によって変化することを発見する。近代において、「性欲」を抑圧されるものとして発見したように、サテュルナンは肉体をキリスト教世界とは無関係に発見する。その後修道院に入り聖職者になろうとも、サテュルナンの発見は、自分で見出したものである。『ドン・B***の物語』では、性的欲望をもつ肉体が肯定的に描かれている。作者は、欲望する肉体を肯定的に描くことによって、肉体を評価し、肉体的欲望を罪悪視するキリスト教の価値観を挑発しようとしている。

このような欲望の肯定は、裸体画を描くロココ精神と通じるものがある。フランソワ・ブシェが1751年に描いた『オミュルフィ嬢』の明るい肉体賛美は、『ドン・B***の物語』の出版後約10年を経ているが、肉体を美しいものと見做

16) *Ibid.*, pp. 384-386. 「僕の趣味はまだ十分に洗練されておらず、あなたの本当の価値を知りませんでした」という文は、『ドン・B***の物語』のタイトルの意味をよく表している。

17) リベルタン文学の定義に関しては、拙著『リベルタン文学とフランス革命』の「第2章 リベルタン文学とは何か？」を参照のこと。



フランソワ・ブシェ『オミュルフィ嬢』1751, ヴァルラフ=リヒャルト美術館, ケルン.

し、肉体的欲望を否定しない精神は共通のものである¹⁸⁾。この点では、『ドン・B***の物語』はロココへと至る精神の先駆的役割を果たしていると言える。では、18世紀の読者が見出したと思われる二つ目の関心である宗教についてはどのように描かれているのだろうか。

18) ブシェが1745年(1749年?)に描いたとされる『オダリスク』がルーブル美術館に残されている。ソファに腹這いになっている構図は、1751年の『オミュルフィ嬢』と同様である。また、1751年のものと同様の構図の『オミュルフィ嬢』1752年が、ミュンヘンのアルテ・ピナコテークに所蔵されている。ソファを用いた一連の裸体画は、当時よく読まれたクレヴィヨン・フィスのリベルタン小説『ソファ』からブシェが着想を得たのかもしれない。

2. 宗教についての関心

すでに見たように、『ドン・B***の物語』ではキリスト教が批判されている。その批判は、禁欲を説くべき聖職者たちが、自らの快楽を求めて性的欲望を満たそうとする場面の描写によって、読者には明らかになる。トワネットとともに性的快楽を追求するポリカルブ神父、モニックがいた修道院の院長と修道女アンジェリックとジェローム神父との三角関係、そして何よりも聖職者でありながら、いやむしろ聖職者であることを利用して懺悔に来る女性たちを次から次へと性の餌食にするサテルナンの行動から、痛烈な聖職者批判、キリスト教批判を読み取ることができる。スユゾンの友人モニックは、修道院で性的欲望を押さえられず、ジェローム神父の従僕のマルタンと恋に落ち、行為に至るが、妊娠してしまう。そのことを知ったマルタンは、以前アンジェリック修道女が用いた墮胎のための「飲み物」をモニックに渡すことを約束する。語り手モニックの修道院内部の荒廃した性関係は読者の関心を惹き付け、聖職者に対する盲目的な尊敬に綻びを生み出したことだろう。

アンジェリック上級修道女が私 [モニック] よりも前にこれを飲んだ経験があるとのことでした。ジェローム神父がこの修道女と個人的にもちえた関係を知りたいと思いました。私は彼女のことを死ぬほど嫌いでした。というのも、格子窓の事件の日に、私に対して最も激しい非難をした一人だったからです。私は彼女のことを常に貞潔な女だと見ていました。なんて間違った考えをしていたのでしょうか！ 彼女は邪悪な性格をうまく偽装することを知っていただけに、また美徳の仮面のもとに腐った気質をヴェールで包み隠していただけにより厳しくなり、その裏でジェローム神父と規則的に情事を楽しんでいました¹⁹⁾。

「格子窓の事件」とは、ある修道女の弟が修道院に面会に来たときに、その弟は姉がいない隙を利用してモニックに愛のサインを送り、近づいたモニックの胸を格子窓越しに掴んで、弄^{いじく}っているところを姉に見つかり、修道院中が

19) Latouche, *op. cit.*, p. 375.

知るところとなった事件である。格子で覆われた閉鎖空間である修道院で繰り広げられる性に纏わるさまざまな出来事は、非人間的な空間が生み出す不自然なものとして、デイドロの『修道女』に先駆けて、読者の関心を惹いたのではないだろうか。禁欲の世界であるべき修道院が、実は欲望が渦巻く世界であることは、現在の読者なら当然と思うかもしれないが、18世紀の読者にとっては踏み込めない聖なる空間であるだけに、覗き見たいという欲望を掻き立てる刺激的な場だと考えられる。

こうした描写から読み取れるのは、作者のキリスト教モラルに対する批判である。では、作者はキリスト教モラルのなかで、なぜ「性のモラル」を問題にしたのだろうか？ そこには作者の戦略が透けて見える。「性」は誰にでもかわかる、万人にかかわる問題である。キリスト教は禁欲を説き、肉体を罪悪視するが、「性的快楽」は現実のものであり、誰もが感じる快楽である。それがどうして罪なのか、なぜ快楽は禁じられるのか、おそらくこうした疑問が『ドン・B***の物語』のテキストの背後には一貫して流れている。

歴史を振り返ると、キリスト教が生まれ、その支配を強化するようになって以来、「快楽」は危険視されてきた。快楽の追求は、秩序を乱し、モラルを逸脱する。あまりにも激しい欲望は、理性を失くし、暴力的になり、破壊的で、死と隣り合わせである。したがって、社会にとっては「性」は危険なものであり、取り締まりの対象であった。何よりも18世紀フランスでは、本論の「Ⅱ. 出版と警察の捜査」で見たように、『ドン・B***の物語』に対する警察の迅速で執拗な捜査が、権力の意志をよく表している。当時の精神的支柱であるキリスト教に対する批判、そのなかでもキリスト教モラルに対する批判は、秩序維持の観点から、権力にとっては許すべからざるものであったことは間違いない。では、読者はキリスト教やそのモラルに対する批判から何を読み取ったのだろうか？

「性への関心」に続いて読者が読み取ったのは、聖職者の偽善だろう。モラルを説くべき聖職者が、自分の欲望を満たすために展開される修道院内のさまざまな出来事は、読者の関心を惹き付けたに違いない。しかもこうした関心

は、聖職者への批判、キリスト教への批判を生み出す契機を含んでいる。読者はさらにこうした批判に論拠を求めるかもしれない。その論拠は、『三詐欺師論』などの17世紀から地下で流通していた宗教批判の「地下文書」ではないか。「リベルタン文学」も、キリスト教を批判する「地下文書」も同じ「哲学書」として地下で流通し、よく読まれていたからだ。キリスト教による「性的快樂の否定」や「禁欲の正当性」という問題は、読者への疑問として強く印象付けられたのではないかと考えられる。

また、こうした問いは、「幸福とは何か」を考えさせる。サテウルナンもトワネットとポリカルブ神父の性行為を目撃しながら、幸福について考え始める。

「ああ、彼らはなんて幸せなんだろう！」と僕は叫んだ。「彼らは喜びに夢中になっていた。彼らが味わった快樂は途轍もなく大きいものであるに違いない。ああ……、彼らはなんて幸せなんだ！」僕は幸福という考えに飲み込まれ、それについてじっくりと考える力を奪われてしまった²⁰⁾。

サテウルナンが見出す幸福は、現実的で、実現可能な、身近に手に取ることができる幸福である。「性的快樂」はサテウルナンの眼差しを、現実に向けさせる。それは、「性」が誰しも実感できる、現実的な快樂であるからだ。ここには、幸福はあの世のものではなく、この世のものであることを導く「性」の役割が見て取れるだろう。

「性」はまた、人間を剥き出しにするという役割をもっている。うわべを剥ぎ取り、羞恥心さえも剥ぎ取ってしまう。取り繕った偽善を、「不謹慎な宝石たち」が暴露するように、白日の下に曝け出してしまふ。隠すべきものを剥ぎ取られた裸体は、あるがままの現実を見せてくれる。偽善を暴くという「性」の役割は、これまであまり指摘されてこなかったが、「性」のもつ重要な働きではないだろうか。他者に剥き出しの自分を見せること＝裸体を見せること

20) *Ibid.*, pp. 338-340.

は、装い、飾る偽善を暴き出す力をもっているからだ。こうした「性」がもつ力は、むしろ積極的に評価しなければならない。では最後の哲学的関心について見てみよう。

3. 哲学についての関心

哲学的議論が、『女哲学者テレーズ』やサドの『閨房哲学』のように、『ドン・B***の物語』のなかで展開されるわけではない。しかしながら、登場人物の考え方、思考方法は哲学的である。サテルナンにしろ、モニックにしろ、自分で真実を見出そうとしているからだ。フランス18世紀は「啓蒙の世紀」と言われるが、これまで真実と教えられてきたことを疑問に付し、自分の思考によって真実を見出そうとする登場人物の姿勢は「啓蒙」を体現している。モニックは、女たちを縛る「貞潔」を求める当時の社会的慣習について、強く批判している。

私たち女は自分の心の運動を司る主^{あるじ}ではありません。生まれつき快樂の魅力に取りつかれた私たちが、最初の感情を奉^{ささ}げるのはこの快樂に対してです。理性の厳しい忠告におびえることのない性格をもった幸せな女たち、彼女たちは自分たちの心の性癖に対する救いを理性の忠告に見出します。しかし、彼女たちの幸福は拒まねばならないのでしょうか！ そんなことはありません、彼女たちが貞潔という果実を味わうこと、それはかなり高くつくものです。というのも、彼女たちは快樂を知らないからです。ところで耳に痛いこの貞潔というものは何なのでしょう？ それは絵空事で、われわれ女を抑圧する、囚われの身を表す言葉です。この想像上の美德を称賛することは、われわれにとって、赤ん坊を楽しませ、泣き止まらせるガラガラのようなものなのです²¹⁾。

18世紀フランス社会は慣習社会である。慣習社会は「古くから受け継がれている生活上の慣わし」を守る社会である。慣習の機能には集団のなかで生きる

21) *Ibid.*, p. 354.

ための実用的な側面と集団を統治するための規範的な側面があるが、ここで問題になるのは後者である。集団のなかの文化を尊重することが、慣習社会には求められる。集団の構成員は、慣習を守ることによってしか生きていけない。慣習からの逸脱は、悪い評判をもたらし、集団から排除される。それは、集団のなかでの死を意味し、その集団から出ていかなければならない。その典型が宮廷社会であるが、慣習社会は農村にもあり、都市のあらゆる職種のなかにもある。それは聖職者の社会も同様であるが、形式がより重要な社会であるだけに、慣習からの逸脱にはより厳しい社会であるだろう。こうした慣習社会をリベルタン文学は滑稽化する。慣習の滑稽さ、盲目的に慣習に従うことに疑問を投げかけ、批判している。クレビヨン・フィスの『ソファ』も、デイドロの『不謹慎な宝石たち』も、「貞潔な女」を探すことが主題であるが、こうした主題が明らかにしているのは「貞潔」を求める慣習社会と「見せかけの貞潔」を求める女性たちへの批判である²²⁾。当時の女性たちにとって重要なのは、「自尊心」と「名誉」であり、そのために見かけを取り繕うことであった。「貞潔であること」よりも、「貞潔と見られる」ことがより重要であり、慣習社会で生きていくための戦略なのである。したがって、慣習社会では自己の内面を隠してでも、慣習に従わなければならない。モニックが、貞潔とは「絵空事で、われわれ女を抑圧する、囚われの身を表す言葉です。この想像上の美德を称賛することは、われわれにとって、赤ん坊を楽しませ、泣き止まらせるガラガラのようなものなのです」と述べて、痛烈に批判するのはこの慣習社会である。

では、モニックは慣習社会の偽善を見破った後、どうするのだろうか？ 彼女は慣習にとらわれないで自分で真実を見出そうとする。「耳を傾けなければならないのは心の声だけよ。従わなければならないのは、心の忠告だけなのよ²³⁾」と、モニックは「心の声」に耳を傾ける。

22) 拙著『リベルタン文学とフランス革命』の「第3章 リベルタン文学の始まり」を参照のこと。

23) Latouche, *op. cit.*, p. 355.

ときどき私は部屋に閉じこもり、物思いに耽ふけりました。それが、私の一番好きな友達の代わりとなったのです。こうした物思いで、私は何をしていたのでしょうか？ 女というものは、一人になると男のことしか考えなくなります。私は自分の心を探り、心が何を感じているのか説明を求めました。私は全裸になって、陶然としながら自分の姿をよく見ました。そして、自分の体のありとあらゆる箇所を燃えるような眼差しで見つめました。私はじりじりとして、両脚を開き、ため息を漏らし、想像力が掻き立てられました。すると自分の前に一人の男が現れ、彼を抱きしめるために両手を広げると、私の性器は激しい火によって焦がされるようでした。しかし、そこに指を入れる勇氣はありませんでした。自分の体を傷つけることを恐れていたからです。そこがうずうずと疼くのかを感じて辛かったですが、その疼きを鎮めようとは思いませんでした。時には負けそうになって、指をあてがったこともあります。自分のやろうとしていることに怖気づき、その手を慌てて引っ込めました。手のひらをかぶせ、押し当ててもみました。最終的に、私は欲望に身を任せ、指を入れました。苦痛を忘れ、快樂しか感じませんでした。快樂があまりにも大きかったので、自分は死んでしまうのではないかと思いました。するとまた、もう一度やりたくなり、力が残っている限り私は同じことを何度も繰り返したのです。

私は自分の発見に有頂天になりました。その発見は、私の精神に明かりを灯してくれました。つまり、私が思ったのは、指があればほど甘美な瞬間をもたらすのであれば、男たちは私が一人で行ったことを私たちと行くに違いなく、また私が指を入れたところに指に取って代わるものをもっているはずだということでした。というのも、それこそが快樂の真の道であることを疑いえないからでした。ここまで知ってしまうと、これほどまでの快樂を与えた代替物ではなく、男がもつ本物を見たいというこれまでにない激しい欲望を感じました²⁴⁾。

モニックは自分の心を探り、心が何を感じているのか説明を求める。彼女にとって、心が求めるのは男性であり、男との性的快樂である。肉体の写実的な描写は、読者の想像力を掻き立てるポルノの要素を含んだエクリチュールであ

24) *Ibid.*, pp. 355-356.

る。しかし、この箇所が重要であるのは、エロティックな描写よりも、モニックが自分で疑問を見つけ、自分で考え、自分の答えを見出そうとする態度である。ここには、慣習を疑問に付し、個人で思考しようとする姿勢がある。すでに指摘したことだが、快樂こそが心の声であり、オナニーを発見して有頂天になったモニックは、「その発見は、私の精神に明かりを灯してくれました」と「*lumière*」（明かり）という語を使って説明している²⁵⁾。クレルヴァルも指摘しているように、知に対して盲目である登場人物が世界を発見するモチーフは、リベルタン小説のなかでは頻繁に表れるモチーフである²⁶⁾。さらにモニックは、「指があればほど甘美な瞬間をもたらすのであれば、男たちは私が一人で行ったことを私たちと行うに違いなく、また私が指を入れたところに指に取って代わるものをもっているはずだ」と推測し、それが「男性器」であることを見抜く。こうした思考の歩みによる発見を、彼女は「ここまで知ってしまうと (*à ce degré de lumières*)」と述べて、「*lumière*」（明かり、光）に照らし出された「啓蒙」のイメージによって説明している²⁷⁾。暗闇の世界に光が差し込み、その光によって新たな知の発見が生まれ、世界がこれまでと違って見える、こうした「啓蒙」のイメージをまさにこの箇所は描き出している。

またこの箇所で重要なのは、「発見」がモニック個人によってなされている点である。人に教えられ、導かれた「真実」ではなく、自分自身で見出した独自の「真実」は、モニック「個人」が生み出したものである。「個人」という意識は、自分を独自のものと思い、独自に思考し、自由に考えられることから生まれる。それは、慣習を疑問に付す意識でもあり、これまで盲目的に信じてきたものを疑う意識でもある。

こうした思考はまた、ロックの経験論の流れを汲み取っていて、エルヴェシウスやコンディヤックの「快樂の哲学」と共有する思想をもっている。「快樂

25) 拙著『リベルタン文学とフランス革命』p. 56を参照のこと。

26) Latouche, *op. cit.*, p. 1124, note 11.

27) フランス語では、「啓蒙 (*Lumières*)」は「*lumière*」（明かり、光）の大文字で始まる複数形である。

の哲学」の背景には、17世紀の「自由思想家」たちが取り上げたエピクロス
の哲学があると考えられるが、この点についてはまた別の機会に述べたいと思
う。

では読者は、このようなモニックの思考の歩みを前にして、何を読み取った
のだろうか？ モニックは自分の心の声に耳を傾けて、その声が男との性的快
楽を求めていることを発見する。読者もまた彼女と同じことをしただろうか？
それはわからない。しかし、「自分の心の声」に耳を傾けようとした読者はいた
はずである。シャルチエの読書論を引き合いに出すまでもなく、読書は多様
な読みが可能で、誰もが同じ読みをするわけではない。読書行為は個人的なも
のであり、自分の経験、知識、関心などによって一つとして同じ読みがないと
言える。とは言え、読書はテキストを読み進める読者を立ち止まらせて、考え
させるという、読者に共通の機能も持っている。モニックのように「自分の心
の声」を聴くために、読書を中断し、内省し、自分と向き合う読者の存在が、
この箇所背後に想像できるのである。読者がどのような「心の声」を聴いた
のかは重要ではない。重要なのは、「心の声」を聴こうとする姿勢だ。ここには
個人が生まれ、その個人は思考し、自分の欲望を感じ取り、現実に向け、
自分の幸福を望む人間を生み出す力があるからだ。したがって、こうした力を
生み出す『ドン・B***の物語』は、哲学的作品と言えるであろう。

V. おわりに

われわれは『ドン・B***の物語』の魅力について考えてきた。18世紀の「仮
想の読者」の関心が、「道徳、宗教、哲学」にあることから、この三つを中心
に検討してきた。1741年に出版されたこの作品は、リベルタン文学のなかでは
『女哲学者テレーズ』（1748年）とともに、18世紀を通してよく読まれたベスト
セラーのひとつであった。したがって、これら二つのテキストは、18世紀フラ
ンスのリベルタン文学の中心に位置している。両者には、過激で露骨な性描
写、性を用いたキリスト教批判、快楽重視の哲学という類似点もあるが、性描

写は『ドン・B***の物語』がより過激であり、『女哲学者テレーズ』では性的場面と哲学的議論が交互に出てくるといふ相違点も見られる。性的場面と哲学的議論を交互に描くという手法は、サドのさまざまなテキストに引き継がれており、これら二つのテキストについて、サドは『ジュリエット物語』のなかで次のように述べている。

『ドン・B***の物語』について

最初に目に付いたのは『ドン・B***の物語』でした。それはリベルタン作品というよりも猥褻な作品で、純真無垢で誠実な作品なのですが、噂によると、著者は臨終の床で作者であることを悔悛したそうです……何と愚かなことでしょう。人生の最後の瞬間に、生きている間に言おうとしたり、書こうとしたことを悔い改めるような人間は臆病者で、後世の人々はそんな記憶に不名誉の烙印を押すはずです。

『女哲学者テレーズ』について

ダルジャンス侯爵の筆になる魅力的な作品『女哲学者テレーズ』は、目的を明らかにしてしながらその一部分しか実現させていませんが、淫楽と不敬虔を巧みに結び付けている唯一独自の作品で、たちまち人々の間で読まれ、作者が当初考えていたように、最終的には不道徳な本になるでしょう²⁸⁾。

プレイヤッド版の『ジュリエット物語』を注釈しているミッシェル・ドロンは、『ドン・B***の物語』に言及して注のなかで、「この小説はサテルナンの性の遍歴を物語っている。しかし、それらは理論化されることも哲学的に立証されることもない²⁹⁾」と述べている。確かに『ドン・B***の物語』には、『女哲学者テレーズ』やサドの『閨房哲学』、『ジュリエット物語』に見られるような哲学的議論はあまり見られないが、われわれが先に見たように哲学的思考を誘う^{いざな}という点で、哲学的である。サドは、ラトゥシュが自分の作品であること

28) *Histoire de Juliette, Sade Œuvres*, t. III, Bibliothèque de la Pléiade, pp. 590-591.

29) *Ibid.*, p. 1466.

を認めなかったことを批判しているが、サド自身も一連の「秘教的」作品については自分の名前を偽装しているのでラトゥシュに対する批判は当たらない。むしろサドの批評のなかで注目すべきは、『ドン・B***の物語』を「純真無垢で誠実な作品」として理解していることだ。「純真無垢 (la candeur)」という表現は、何を指しているのだろうか？ サテュルナンの行動だろうか。あるいは快樂に従順な登場人物たちだろうか。あるいはまた露骨で直截的な性描写だろうか。この語の形容詞「純真無垢な」が« *candide* »であることから、ヴォルテールを意識しているのではないかと考えるのはあまりにも考えすぎであろうか。しかしそのヴォルテールは、自分の名前がラトゥシュと結び付けられることには憤慨していたらしい³⁰⁾。

リバルタン文学のなかで、サドは『女哲学者テレーズ』を「淫樂と不敬虔を巧みに結び付けている唯一独自の作品」として高く評価している³¹⁾。サドの好みはリバルタン文学のなかでは『女哲学者テレーズ』であったとはいえ、『ドン・B***の物語』の作品自体については、「最初に目に付いた」と書いているように、彼が評価していたことをこの箇所はよく示しているように思われる。

ところで、サドが書いているように、ラトゥシュは死ぬまで『ドン・B***の物語』の作者であることを否定したが、なぜ危険を犯してこの作品を書き、出版しようとしたのだろうか？ 「II. 出版と警察の捜査」のところで登場したモンティニーは、リエージュでフランス軍兵士に『女哲学者テレーズ』と『ドン・B***の物語』を販売して一儲けを企んだが、ラトゥシュが儲けようとした痕跡は見当たらない。金のために書いたことを否定する証拠はないが、おそらくそれ以外の目的があったのではないか。それを明証することは今となっては難しいが、読者を意識して書かれたのではないかと推測することはできる。では何を読者に伝えたかったのだろうか？ キリスト教批判なのか？ キリスト教が説くモラルへの疑問を投げかけることなのか？ 性を通して問題を提起

30) Latouche, *op. cit.*, p. 1118.

31) このあたりのことは、拙訳『女哲学者テレーズ』および『閨房哲学』の「訳者解説」を参照のこと。

したかったのだろうか？ テクストを通して疑問は投げかけられているにしても、その解決策は何も示されていない。

では読者にとって、『ドン・B***の物語』の魅力は何なのだろうか？ その答えが、われわれが考えてきた三つの視点である「道徳、宗教、哲学」であるだろう。しかし、それだけで十分なのだろうか。性を描くエクリチュールの過激さや滑稽さもこの作品の魅力である。最終的にサテルナンは梅毒にかかり、男性器を切られるという結末を読者はどのように解釈するだろうか。神による処罰なのだろうか、それとも作者のカモフラージュと考えるだろうか。ただ一つ言えるのは、読者に対してこうしたさまざまな疑問を提起し、多様な読みを可能にするこの『ドン・B***の物語』は、開かれた作品であるということだ。

しかしながら権力にとっては、たった一つの読みしかなかった。キリスト教を冒瀆する「猥褻」な作品という読みである。それゆえに、警察は血眼になって作品を回収し、作者を捜し回る。しかし、最後には必ず行き詰まる。作者を擁護する権力者がいるからだ。その権力者は権力の近くにいるはずだ。でなければ、権力を発揮することはできない。警察の調書が描き出す警察対リベルタン文学の闘いは、現在から見るとなかなか面白い。リベルタン文学を警察がいかに許せない、^{おぞ}悍ましい、危険なものに見做していたかがよくわかるからだ。リベルタン文学には権力が恐れるような秩序破壊能力があるのだろうか？ 弾圧を受けるのは、人間がもつ非理性的側面をリベルタン文学が表しているからだろうか？ 非理性的側面は危険なのだろうか？

『ドン・B***の物語』は、ルイ・ベルソ (Louis Perceau) によると、1741年の初版から1915年までの間に29版刷られている³²⁾。さまざまな時代の読みに耐えて生き残り、さまざまな解釈を生み出す開かれた作品が傑作であるとするなら、この作品は18世紀フランスに生まれた最も猥褻な (権力にとって)、しかも傑作とすることができるだろう。

32) Cf., Hubert Juin, *op. cit.*, p. 11.